■発音符号

十六世紀頃から、キリスト教の宣教師が布教のために東洋に進出して来たので、彼らの文字は数が少ないこと、その文字は意味を有たず、単に発音を示すことなどに気付き、自分たちも発音符号を有ちたいと願ったに違ひないと思ふ。

我が国でも、徳川綱吉に登用された新井白石は、オランダの書物に接し、「煩雑な漢字を廃して簡便なローマ字を採用した方がよい」といふ意見を述べてゐるほどであるから、中国でも、さういふ人は少なからずゐたに違ひない。

宣教師たちは、布教のために、 漢字を学ぶ必要があって、漢字とローマ字とを対照させた学習書を作ってゐる。これらの学習書は、中国人を驚かせると同時に、かういふ発音符号を自ら作らなければならない、といふ気持を起させたに違ひない。

しかし、中国人の手によって実際にそれが作られるやうになったのは、もう二十世紀近くになってからである。蘆戇章が、一八九二年、ローマ字にヒントを得て、“中国第一快切音新字”といふものを作ったのがその初めである。

その後、王照の“官話合声字母”、これに手を加へた、労乃宣の“増訂合声簡字譜”などが作られるが、何としても広い中国の事であるから、ある地方の発音を中心にすれば、他の地方からは批判が出るのは避けられない事であった。

一九一二年、清国政府が倒れ、中華民国政府が誕生すると、中央で、漢字の発音を示すための符号を作る案を決議した。かうして作られたのが“注音字母”である。その後、数次にわたり改訂されたが、今では、中華民国台湾省でこれが使用されてゐる。